

受領者報告書 [日本音楽学会国際研究発表奨励金]

東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻 表象文化論コース
博士課程2年
堀内 彩虹

1. 発表学会について

学会名：Visual and Critical Studies Conference（略称：VCS）

会期テーマ：Dissonance

開催期間：2015年3月13日および14日

開催場所：School of Art Institute of Chicago, Chicago, The United States

この学会は、シカゴにある School of Art Institute of Chicago（シカゴ美術館附属美術大学）が主催する、若手研究者を主たる対象とした学会である。国際学会という位置付けではあるが、実際のところ参加者のほとんどはアメリカを拠点に研究を行う研究者である。ヨーロッパ圏からの参加者は少ない割合ながらいたようであるが、主催者によれば、アジア圏からの参加者は報告者のみであった。

当該学会は、学際的研究を対象としている。美術、舞踊、音楽、映画など幅広いアートを対象として学際的なアプローチで研究をする研究者たちの学術的交流が目的である。プログラム内の各セッションは、ゆるやかにではあるが、美術、音楽、批評といったように主たる研究対象によって分けられていた。報告者は音楽研究のセッションに参加した。全体としては美術研究の発表が多かったように感じる。音楽に関する発表は数の上で少なかった。

テーマは学際的研究を対象とした学会らしく **Dissonance** と設定されており、副題的に **Noise** という言葉も併せて使われていた。上記テーマを選んだ理由について主催者は「あらゆるアートを貫くことができる問題提起として設定した」とコメントしており、報告者と会話を交わした多くの参加者がこのテーマに興味を持って発表を決めたと話していた。

なお、キーノート・スピーカーはボリス・グロイスであった。

2. 研究発表要旨

発表日時：2015年3月14日 10:30 パネル1 “Resonance”

発表タイトル：ヴィブラートを聴く際の身体的ノイズとしての「違和感」—日本のこぶしの聴取を例に

本研究は、歌声を聴くことにおいて、人が特定のヴィブラートに対して感じる身体的な「違和感」を身体的「ノイズ」と考えるとき、その「ノイズ」が生まれる聴取のプロセスを声に対する身体的記憶との関係から提示しようとするものである。本研究においては、日本のヴィブラートの一種としてこぶしが例に挙げられ、それが聴者に違和感を与える音になりうるという仮定に基づいて考察されている。

こぶしは日本特有の声の一種であり、声の中に持続的なピッチの変化を含む声として知られた歌声の効果の一つである。日本の伝統音楽、民謡、演歌などにおいてよく聞かれている。こぶしという用語は現在、幅広い定義を持つと考えられ、広義においては西洋音楽由来のヴィブラート音も含めて、声を揺らすあるいは音を持続的にのびしながら変化させる効果すべてをこぶしと呼ぶ例もある。しかしながら、本研究では西洋音楽における声楽で用いられる効果としてのヴィブラートとは明確に区別をし、西洋音楽のヴィブラートよりもより声の揺れすなわち音の変化が大きな日本特有の声をこぶしとした。本研究が着目するのは、こぶしを聴いた際に聴く者が痛みやむず痒さを含む身体的な違和感を感じるという現象である。西洋音楽におけるヴィブラートが美的に「美しい」と判断される声あるいは人に心地よい感覚をもたらすような共鳴を伴った声として捉えられることが多い一方で、こぶしは人によって上記のような効果をもたらすのはなぜか。歌声—ここではとりわけヴィブラート—を聴く際に感じる「違和感」はどこからくるのか。その問いに対して、声の知覚における声をめぐる身体的記憶とその想起という観点からひとつの答えを提示するのが本研究の目的である。

この問題にアプローチするために、声を聴くという行為における次の二つの問題について考えたい。まず一点めは、歌声を聴くという行為が持つ主体性である。歌声は人間の身体を楽器とし、発声が可能で身体を持った人であれば誰もが音を出すことができるという点において音楽におけるあらゆる楽器と異なっている。また、歌に限らず発話も含めて考えるならば、声を出すという経験は誰もがもちうるものであり、声を出す際の身体的感覚を人は知っている。すなわち、歌声という音は人間にとってあらゆる楽音の中で最も身体的記憶を備えた音であるといえる。人は歌声を聴くとき、自分が持つ声の身体的記憶をもとに聴こえてくる声から声が含まれもつさまざまな情報を読み取ることができると考えら

れる。その一つが発声のプロセスである。声の記憶と現前する声とのある種の「照合」のプロセスが声の聴取における主体的経験に依拠していると捉えた上で前出の問いに取りかかりたい。そして二点めに挙げられるのは、声の持つ有形性である。歌声について書かれた批評において、われわれはしばしば声の身体的側面を捉えたことばを目にする。すなわち、これは声が音としてではなく、身体的運動の結果として捉えられた痕跡である。さらに、その中には目に見えない歌手の身体について表現されたことばもみられる。目に見えない歌手の身体を「みる」ことを可能にしているのは声の身体的記憶であると考えることができる。そこで本研究では、こぶしを身体的な視点から捉えたことばを例に挙げ、それを分析することにより、人が声を「聴く」だけではなく、自らの身体的記憶を通して「感じて」いることに言及したい。

以上のように、本研究では、歌声—ここではとりわけヴィブラート—を聴く際に聴者が感じる「違和感」を身体的ノイズと捉えた上で、それが生まれるプロセスを聴者がもつと考えられる声の身体的記憶との関係から考察する。本研究によって、歌声をめぐる美的価値判断のプロセスの一端を示すことができると考えている。

3. 質疑、感想と反響

各パネルにおいて質疑応答の時間は各パネラーには与えられず、パネラー全員の発表の後、約 30 分の全体のディスカッションの枠内で行われた。報告者個人に対する質問およびパネラー全員に対する質問を合わせるとかなり多くの質問を頂いたため、ここに全てを記載することはできないが、主に報告者個人に寄せられた質問および指摘をまとめた。質問は大きく次の二つの内容に大別できると考える。まず一つめは、声の記憶をめぐる問題である。声の聴取における主体的経験の中で参照される声の記憶はどのように記憶され、また何をきっかけに想起されるのかという問いが会場から投げかけられた。その問いは、会場全体を巻き込んだ議論の中で、耳が聞こえない人にとっての声の記憶はいかなるものか（そもそも声の記憶を持ちうるか否か）という問いにも発展した。それらの問いに対して報告者は、当該学会に提出したペーパーの中で引用しているフレデリック・フースラーの *sound-picture* (Husler: 1976) の概念を用いながら論の補足を行った。そして二つめは、言語との関係についてである。報告者の研究がこぶしという日本固有の声の効果为例に挙げたものであったことから日本の声と日本語の言語的性格との関連性について議論が及んだ。この問題について報告者は、特に言葉の発音における身体的特性—口の中の空間的

形状などを日本語の母音の発音が持つ音と関連させながら応答した。この際、会場の聴衆およびパネラーによって、さまざまな国の言語と比較しながら議論が進んでいく様は国際学会ならではであり、非常に刺激的であった。

学会に参加した中で最も強く感じたこととして、学術的議論における語学力の不足が挙げられる。報告者はこれまでに東アジアの大学院生および若手研究者で構成された国際セミナーには参加経験があったが、英語ネイティブを中心とした学会に参加するのはこれが初めてであった。よって、これまでよりもコミュニケーションにおいて苦戦を強いられることはある程度予想していたが、実際は想像以上に議論のスピードが速く、また学際的な学会という側面もあってか議論の内容が多岐に及んだために、議論の進展を追うのに必死であった。他方で、学会の学際的な性格上、異分野の研究者たちとも共通のテーマを通じて発展横断的な議論を交わすことができたこと、また音楽以外の研究を通して音楽研究にも通じる新たなまなざしを得ることができたことは今回の大きな収穫であった。

最後に、このような貴重な機会を与えて下さった住友生命保険相互会社ならびに日本音楽学会に心より御礼申し上げます。